

【目的】結婚生活の幸福度を測定するため、夫婦の生活諸条件を分析し、家庭生活の幸福に影響する諸要因を見つけ出し、結婚生活に役立てることを目的とする。1953年に牛島義友・末広和子等は、ターマン(L.M.Terman)の研究に習って家族関係学において、画期的な結婚生活の幸福度の研究を行っている。その結果、夫婦夫々の幸福度が結婚経過年数によって著しく異なっていた。またこれは、ターマンのアメリカの夫婦の結婚幸福度の経時的变化とも著しく異なっていた。前回調査からすでに35年を経、日本の結婚も、当時の媒酌結婚優勢な時代から、恋愛結婚が多数を占める時代に変化している。三分の一世紀をはさんで、夫婦の結婚幸福度に変化が現れているかどうか研究することは、現代の結婚、夫婦関係を考えるうえで大変意義深い。

【方法】1987年10月から12月末にかけて、東京周辺及び仙台市周辺の学校の学生の父母に、学生および教員を通じて質問紙を配布。妻分、夫分を一組とし、各々回答者本人に厳封して貰い、回収した。妻分832票、夫分842票、合計1,674票を分析対象とした。回収率は69.75%

【結果】今回調査は、夫婦とも前回の日本における調査結果よりターマンが行った米国の夫婦が描いたカーブに類似している。先ず夫と妻の幸福点を比較すると、今回はターマンの場合と同様、妻の方が全体的に幸福度が高く、夫婦とも中間で下降する。妻は結婚当初幸福点が最高で、それ以後経過年数30年で多少上昇するが、後下降の一途を辿る。前回との類似点は、現在でもやはり妻は晩年になって夫より幸福点が低いということである。